

昭和二十一年七月二十三日發行  
（毎月一回・十五日発行）可

（通第三一八号）

次 信  
信 教 的 家 庭 福 島 政 雄 (5)  
「青 蓮 華」歌 抄 白 井 成 允 (9)  
慈 母 の 念 力 (2) 高 千 穂 徹 乘 (13)

目 次  
歲 末 の 斷 想 花 田 正 夫 (17)  
歳 末 の 断 想 木 村 無 相 (17)  
歲 末 の 断 想 (20)

# 慈光

第二十七卷

第十二号

# 「教行信証」の三哉

○ 誠なる哉や、攝取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなけれ。

○ 月氏の聖典、東夏、日域の師釈に、遭い難くして今遇うことを得たり、聞き難くしてすでに聞くことを得たり、真宗の教・行・証を敬信して、特に如來の恩徳の深きことを知んぬ。ことをもって聞くところを慶び、獲るところを歎するなり矣。

(総序)

○ 誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たのし)ます。恥ず可し、傷(いた)む可し矣。

(信巻)

○ 慶しき哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、良(まこと)に師教に恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。

(参考)以上の親鸞聖人の三哉の文は、本願を聞きひらかれた祖聖の、讚歎であり、慚愧であり、感謝である

(総結文)

死せん、往くも亦死せん、一種として死をまぬかれずといふもの、人生いはずの処にかその身を置くところがあらん。

近角常観

死せん、往くも亦死せん、一種として死をまぬかれずといふもの、人生いはずの処にかその身を置くところがあらん。

近時、人生に煩悶する人のごときは實にこの無明界に迷えるものなり。しかして如來大慈父はこの人生空廻の沙漠に迷える我等を召喚したまうなり

「汝一心正念にして直に來たれ我能く汝を護らん」とは實にこれ大悲本願の声にあらずや。

嗚呼、世の行路に悩める人よ、荒涼たる世界に彷徨せる人よ、善友、善知識に遇わざる人よ。乾燥なる学問、冷かなる理論に迷わざるものよ、常にこの慈父召喚の声に聴け

「すべて水火の二河に墮せんことを恐れざれ」と。嗚呼、この慈光我を照護しませり、我ががれんとするも得べからず

○ 人生をして無明の世界に終らしむるか、人生をして光明の世界たらしむるかは、信を得るか否かにあり。

○ 信は人生において如來の慈父悲母ましますことをみとむるなり。信なき者は畢竟この慈悲の親を疑うものなり。疑うものは如何にするも人生に光明を認むるあたわず、遂に人生をして荒涼たる沙漠に彷徨するの想いあらしむ。すでに沙漠にあり、如何にするも一点の希望をも認むるあたわざるなり。

○ 善導大師たとえて曰く、無人空廻(くうこう)の沢にあるが如しと、而してただに空漠にして親友善知識に遇わざるのみならず、貪瞋煩惱の水火、前に横わり、群賊惡獸の悪業うしろに迫りきたる。進まんか進むに處なく、退かんか、退くに処なし。これ所謂返るも亦死せん、住すとも亦



「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ」

智眼くらければこそ如来は燈炬としてあらわれたまう、

罪障重ければこそ、如来は弘誓の船を浮べたまう。

「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず

仏智無邊にましませば、散乱放逸もすてられず」

我等、水火貪瞋煩惱の中に如來清淨願心の白道をたどり決定して疑法（ぎこ）退心を生ぜざるもの、これ金剛不壞の信心にあらずや。

## 二

すでに如來大悲の声を聞く、人生すでに大慈の親ましますを認め得たり。釈尊一代の説教は、東岸上に人の勧むる声なり。如來の本願は西岸上に呼ぶの声なり

「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し

われらが無上の信心を、发起せしめたまいけり」

吾人、何たる幸ぞや、人生仏陀の教に遇いたてまつり、ことに末代五濁の凡愚、如來の悲願を聞きたてまつるを得たり、釈尊説教四十年、まさに涅槃に入りたまわんとするや、王舎城の悲劇、韋提希夫人の幽閉おこる。これまことに人生嫌惡の行路、正に凡愚底下的罪人を救済するの出来ごとにあらずや、是みな大聖怜哀の善巧なる者、この時にあたりて釈尊は本願醍醐の妙味を説きて、極悪最下の衆生

善心を汚し、瞋憎の心つねに功德の法財を焼く、しかれども其間、金剛不壞の白道は人寿百歳のあいだ念々断滅することなし、まことにこれ人生を貫ぬく無碍の一一道なり、人生を意義あらしむる無上涅槃の大道なり。

## 三

噫、二河白道の譬喻は、吾人が内心の実験なり、王舎城の悲劇は吾人が人生の実境なり。しかして二尊の発遣と召喚は親しく吾人が人生の上にくだしたまう大慈父、大悲母の御声なり。吾人はその御声を聞いて信樂開発するの一心に如來の最愛の眞の仏子となる。

無明の大夜はこれがために光明の世界となり、生死の苦海はこれがために涅槃の彼岸をみとむるを得たり。噫、信仰は人生をして意義あらしむる生命なり、信仰は人生をして調和せしむる中心なり。信仰は人生をして根抵あらしむる地盤なり。

世の苦しめる人よ、悩める人よ、世の生活奮闘する人よ、世の罪惡に悶える人よ、世の理論難行に疲れたる人よ、すみやかにこの大慈悲の声を聞け。

従來のあらゆる苦惱の行路はみな我等をして遂にこの親を知らしむる過程たりしを知りて人生の意義明らかならん、世の貪欲に溺るるもの、瞋恚に焼かるもの、はじめてこの大悲の声を仰げて、たちまちに水火の二河をかえり

を導きたまう、これ大聖出世の本意にしてやがてこれ我等罪惡不善の輩にあたえたまう發遣のみ教えにあらずや。今世、人生に苦しめる人は、王舎城の悲劇の再演にあらずや、阿闍世王の煩悶悔悟にあらずや、韋提幽閉の求道にあらずや。まさにこれ弥陀の本願、釈尊の説教をきくべきの時機熟せるものと謂つべし、

「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしませば善導の御釈虛言したまうべからず、善導の御釈まことならば法然のおおせそらごとならんや、法然のおおせまことならば親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべきらうか」

と、嗚呼吾人は親鸞聖人の化導によりて慈父悲母二尊の真意を聞く、吾人は今二尊の意に信順して水火の二河をかえりみず、念々遺ることなく、かの願力の道に乗ずるを得たり、これ吾人が現時の信仰生活に非ずや。

嗚呼、吾人の胸中の白道は僅かにこれ四五寸、まことにこれ四大五陰の有漏（うろ）の穢身はかわらねど、心は淨土に接みあそぶ、しかも瞋恚の火焰は来つて道を焼き、貪愛の波浪は来つて道をうるおす。思うなかれ信仰を得れば煩惱起ることなしと、吾人人生に在らんかぎりは煩惱を断すべからず、煩惱を断ぜずして涅槃を得る所以のもの唯如来回向の一念喜愛心の開發すればなり。愛心つねにおきて

みず、いかにその火焰さかんなるも、その波浪はげしきも遂に慈親の恵みに帰り来る時、人生を調和する統一の中心を発見せん、かくて人生百年悠悠として如來大悲の声を仰ぎ、念々遣ることなく、遂に涅槃の彼岸に趣き、極楽無為の宝國に到りて親しく慈親、親友にまみゆるを樂しむときは、人生の帰趣あきらかにして、前途希望の光明赫灼たるを期せん。かく、曠劫以来無明迷惑の世界たりし人生は、今やたちまちに光明平和の家庭を実現しきたる。

我等、何たる幸せか二尊の慈父母の膝下に団樂して直接の靈勅をきく。愚禿鈔に曰く

「西岸上に人ありて喚んで言くとは、阿弥陀如來の誓願なり。汝の言は行者なり、これ即ち必定の菩薩と名づく龍樹大士の十住毘婆沙論に曰く、即時入必定と、曇鸞菩薩の論に曰く、入正定之教と。善導和尚は希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、上々人なり、真仏弟子なりと言えり」

と。噫、これ吾人極惡深重の衆生が聖尊の重愛を獲るものにあらずや。噫、四海兄弟の真意義は畢竟この大慈父大悲母の下に同一念佛する一道より実現しきたる。行巻に曰く「十方群生海、この行信に帰命すれば攝取して捨てたまわざ、故に阿弥陀と名づけたまつる」

と。噫、十方微塵世界の群生、同一念佛の人として大慈

父の御名を呼びつつ、大悲母の光明の懷ろに攝取せられぬれば、ついに如来の報土に往生して、其膝下にはべらずんばあらず。これ光明名号、内外の因縁の意味たらずんばあらず。愚禿鈔に曰く、

「眞実の淨信は内一

「眞実の淨信は内因なり、攝取不捨は外縁なり。本願を  
信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり。他

力の金剛心なりと知るべし、すなわち弥勒菩薩に同じ」と。これまことに如來の慈父、悲母に遇いたてまつりて、ここに頂召喚の語を聞くの一念、前念命終、後念即生。

の表は立派なれども、その裏が切れ切れの木綿であるのを  
他人に見られるのが嫌なためなり。  
里に帰ってはこれを脱ぎ捨てて置くのを母のたたむにま  
かすことの出来るのは、母は裏も表もよく存じて居るがた  
めなり。  
まだすべてを仏にまかすことの出来ぬのは、大慈大悲の  
親様を他人と思うからである。

本願召喚の声を聞くの一念、前念命終、後念即生。ここに光明の新生涯に入り、金剛不壞の信をいただきて、必定の菩薩、眞の仏子の人生を実現して、能くこれを莊嚴して終に如来常住の涅槃の城に入らしめたまうなり。

臨終をひきよせてみるのもよいが、びくびくしたところではないかとわが心をためしてみるは自力の力味なり。  
ただ阿弥陀さまのびくびくなされぬおまことをたのみた  
てまつるなり。

仏教の家庭

福島政雄

沙弥といふのは元來は正式の僧侶となる候補の地位にある者を称するのであるが、平安中期から鎌倉初期にかけて沙弥といふのは、姿は僧のようで生活は俗人の生活をしている者を称し、その沙弥の生活に宗教的反省の萌芽があらわれてゐることが發見せられるのである。

沙弥の中で後世最も有名になつたのは沙弥教信である。教信は播磨国、賀古の駅の北に住んで妻子を具し、一生を隣里の人々に雇用せられて生活し、しかも念佛をもつて終始したことのう無名の一念仏者である。

沙弥の中で後世最も有名になつたのは沙弥教信である。教信は播磨国、賀古の駅の北に住んで妻子を具し、一生を隣里の人々に雇用せられて生活し、しかも念佛をもつて終始したという無名の一念仏者である。

極樂記によれば、攝津国の勝尾寺の住僧で勝如と云う人

が、十余年間沈黙の行を行じているところに、或る夜中に人があつて柴の戸をたたき、自ら教信と名のり、今日極楽に往生するのであると告げ、勝如上人は明年の今日往生す

るのであると言うのである。勝如は驚きあやしんで人を遣わして賀古の駅を訪れさせると、駅の北に竹廬があつて、その廬の前に死人の屍があり、狗が群つてこれを食うてい

沙弥の生活が宗教的に徹底して仏教的家庭が眞実の意味で出現するようになったのは鎌倉時代である。その時代に

及ばないことを感じ、自分も念仏して期日になつて急に入滅したと伝えられる。これは半ば伝説的の物語であるが、この教信の伝の中にこもる精神は、雇用労働して妻子を具する生活の中に怠仏があるという真理の精神である。しかもこの教信は鎌倉時代に入つて親鸞聖人の理想の人物となつたのである。

る。そこに一老嫗と一童子が居て相共に哀哭している。この故を聞えば、老嫗が答えていう。「死人はわが夫、沙弥教信であります。一生の間弥陀の号をとなえ、昼夜休まず己が業をしました。隣里の雇用の人は阿弥陀丸と呼んでいました。今老後に死別しましたので哭していますのです。」この童子は教信の子であります。」

法然上人は専修念佛をとなえた。そして出家生活と在家生活との優劣はないといつておられた。

「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥、時節の久近く彼の仏願に順ずるが故に」

この根本から出立して「善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して」と言い、「現世の過ぐべき様は念佛の申されんよう過ぐべし。聖で申されば妻を儲けて申すべし。妻を儲けて申されば聖で申すべし」という。これは徹底無碍の境地である。「我はこれ鳥帽子もきざる男なり。十惡の法然房が念佛して往生せんと云うて居たるなり、又愚痴の法然房が念佛して往生せんと云うなり」この根本反省のもとなら信頼である。これは正に平安時代の沙弥の生活が宗教的に徹した境地である。

しかしながら法然上人は、聖で念佛した人である。門下の親鸞聖人になってはじめて信仰と生活と一味の境地で沙弥生活を徹底したのである。親鸞聖人が在叡時代に堂僧をつとめたことはやの内室の惠信尼公の書翰によって知られる。堂僧とは常行三昧不斷念佛を修したのである。叡山の墮落の時代においても一縷の宗教的命を保持していたものが堂僧である。この堂僧の生活を続けることはほとんど二十年、しかも徹底の信

る。これから法然上人に逢うことによつて法然上人の徹底的信仰味に参することを得るようになり、ここに親鸞聖人は自己の現実相を徹見せしめられつつも自然の心をもつて沙弥生活に入り得ることになったのである。

誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たの）します、恥ずべし、傷むべし。

これ正しく沙弥生活に入った後の聖人の心境である。実際に結婚したのは越後に遠流せられた時であり、内室は恵信尼である。自ら愚禿と称されたのも配流以後である。愚禿の禿（とく）の字は涅槃經に、世が末世になれば国土は荒乱し、人民は飢餓して発心出家する、このような人を名づけて禿人といふとあるのから出たものである。故に愚禿というは深い自覚から出た名である。「未法灯明記」にある無戒名字の比丘であるといふ自覚である。

聖人八十三歳の著述に愚禿鈔があり、八十六歳の述作である愚禿悲歎述懐和讚には自己を無戒名字の比丘と慚愧してある。愚禿の自覚は沙弥生活に入る自覚であり、沙弥生活は仏の慈悲に摂取せられる生活であるが、自覚の上では慚愧にたとえぬ生活である。この自覚の生活は出家生活と在家生活とを内面的に統一する生活であり、この生活にお

境に達せずに苦惱し、六角堂の救世菩薩に参籠すること十五夜、その曉方に聖徳太子の文をむすび示現にあづかったのである。

この聖徳太子の文といふのは磯長の太子廟に伝わっている偈文であつて、平安中期頃からの伝説的のものであり、太子を救世觀世音として仰いでいるものである。聖として念佛生活の徹底を得なかつた親鸞聖人は太子によつて深い心情の上の導きを受けていられる。而して觀音の示現といふのは次の四句の偈文である。

行者宿報としてたといふ女犯すとも

私は玉女の身となつて犯され

一生の間能く莊嚴して

臨終に引導して極楽に生れしめん。

これは親鸞聖人が結婚に対する理想のあらわれと見るべきであり、此の玉女とあるのは華嚴經から出ている言葉であつて、親鸞聖人が華嚴經の善財童子の求道物語の中、婁夷女（くいによ）の前生物語に玉女宝という言葉があるところに感銘していられるることを証するものである。

このように聖徳太子への感激と華嚴經の感銘とがあいまつて、百夜參籠祈願の九十五日の曉において觀音の示現に接し、ここに聖人が沙弥生活に入る第一因縁は熟してきただのである。その沙弥は徹底的に宗教味を味得した沙弥である。

常陸時代はその家庭が活生（はつじゆ）ととのうて来た時代である。この深い自覚の下に妻子を貪する生活に入られた聖人の越後時代七カ年は深い内省生活の時代であったと思われる。而して常陸に移られたのは四十二歳の時と推定せられている。

常陸時代はその家庭が活生（はつじゆ）ととのうて来た時代である。この深い自覚の下に妻子を貪する生活に入られた聖人の越後時代七カ年は深い内省生活の時代であったと思われる。而して常陸に移られたのは四十二歳の時と推定せられている。

深化して、或は「釈迦弥陀は慈悲の父母」と云われ、或は「徳号の慈父、光明の悲母」という心境に入り、ことに聖

徳太子を父のように、母のように慕うていられる。その沙弥生活はわざとらしさの無い自然法爾の生活であり、すべてを大悲の親である仏陀の胸に打ちひらいて捧げた生活である。そこには慚愧の心と共に安住のおもいがある。このようにして平安時代中期以来の沙弥の生活が真に宗教的に徹したものとなつたのである。

このように鎌倉時代には全く世間的に隠れたところで仏教的家庭が出現することになった。この仏教的家庭の精神が親鸞聖人の子孫及びその繼承者によつて我が國の庶民の生活をうるおすこととなり、これから後の我が國の社会に深い情操生活をもたらすこととなつた。即ち、帰依、隨順、諦観、法悦というような趣を庶民の家庭生活裡に味わわれるようになつたのである。

昭和四十二年十一月二十六日



## 青蓮華歌抄

三

### 白井成允

狭庭<sup>さには</sup>べに黄葉<sup>もみ</sup>づる萩の下蔭に小鳥らあそぶなむあみだぶ

群鳥の囁く聞けば天地にみのりの声はみちみてるかも  
天地のきよきまことのすみとほりなむあみだぶつの声となりぬる

天地のさなかにたてる命なりとこよの道の光あびつ

おほけなくもなむあみだぶつとききまつるわが煩惱のあやにいとしき

たまゆらの世に生まれきて永へのさとりの道をきくべかりけり

### 金子大榮師のことば

聖人にとっては、信といふものは天上の月が地の上に映つたようなものである。水の上に映る月は天上にあり、天上にある月は水に影を宿す。信とは唯仏の真心である、その真心が見える、その真心が自分のようなものに聞えて下さるそれより外に信はないのである。

君に信あらば信を見せよといわれれば、天の月を指すより外仕方がない、水中の月を取り出す訣にいかない。それを出そうとすれば何にもない、何にもないかといえど本願の尊い思召しが聞えて來るのであります。これが深い信であります。

○ 親の心が子に解つたということは、どれだけ深いものであるか解らぬことで、解つたということは、解らぬとわかつたことになるのである。

○ 四無量心、「慈悲喜捨」とあるが、或訣では捨は護と訣されている。捨とは各々のものをして各々のものたらしめるということになるのであります。それがすなはち護と同じ慈悲の至極であります。

わが涙つくるときなしみほとけの御名を聞きつつ生きてしゆかん  
道に遊ぶ子らことごとく吾が子ぞといつくしみます地蔵尊かな  
八十歳のうまれびちかき今日の朝友のめぐみを食すがたふとき  
四十三年二月二日

おのづから春の光に伸び伸びる木木の榮えようられしからずや

おのがじし己れの色にたのしみつ天地に照る花のかずかず

はからひはは消ゆれば消ゆれみほとけのおんはからひを  
聞くがうれしき

悪しきもの醜きもののいのちいぢをあはれみおはす  
おん悲しみよ

みほとけのみ誓ひ成れり罪業の荒野の暗路照り映ゆる見  
ゆ

各々の花に百千の光あり光かがやくいのちいとしも

きはみなきいのちのいづみはかりなきひかりのいづみな  
むあみだぶつ

四十五年四月十四日

いつくしみみちたらひてぞものみなをとこてらしますな  
むあみだぶつ

菅瀬芳英師の最後の御病床を近角常観師が見  
舞はれ、その時両先生の筆談せられし書幅の  
余白に、道友西本清人氏のお求めにより、し

すぐひます御親なるかも

荒野原くらぎがなかに

ただひとりさすらひこしを

救はんと誓ひたまし

みひかりをかかけたまへり

南無阿弥陀 南無阿弥陀仏

みほとけのくしきみひかり

西のかたへなる刹ゆ

てらします罪のわれらを

とこしへに淨からしむと

みめぐみのもとつちかひに

南無阿弥陀 南無阿弥陀仏

西のかた淨きみくにゆ

われを召す御声ひびきく

罪のまゝ召しにかなひて

六道を今し超えゆく

あさましき業にしばられ

地獄にぞおつべきわが身

みほとけの本つ誓いを

るしまるらせし一首  
みほとけのひかりにあそぶはらからがかたみにかはす  
まごころのあと

### 南無阿弥陀仏讃歌

十一年九月三日玄海灘にて

望の月くまなく照りて

木も石も光かふれり

虫の音もさえわたりつつ

みほとけをことほぎまつる。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

あゝわれらみほとけのこら

はかりなきみめぐみかぶり

御名となへつどいてあれば

さいはひは世にもこえたり

いざさらばみあかしかゝげ

みほとけをほぎまつらなん

十二礼たゞへまつれば

みほとけもゑみてゐませり

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

あゝわれら罪にめしひつ

とこしへに迷ひてこしを

さまざまのおんてだてもて

ことほがんみおやほとけを

あゝわれらみほとけの子ら

はかりなきみちかひきえ

御名ひびく会座につどへば

ゑみませるかもみおやほとけは

南無阿弥陀 南無阿弥陀仏

望の月くまなくてりてあめつちに

みおやほとけの御名ひびくなり

淨きみくにうちたてましし弥陀仏の

本の誓ひををろがみまつる

弥陀仏の本つ誓ひをわがためにつげたまひにしよ

きひとたぶと

父母のめぐみたぶとし大君のみいづかしこしなむ

あみだぶつ

弥陀仏のおほきめぐみを國のうちとくまなくつげんさら  
ばはらから

# 慈母の念

——亡母の三十三回忌を迎えて——

高千穂徹乘

とつて、いちばんさびしいことは、若いものが、ものをいつくれないことです。特別な用意や、お金のかかることではありません。まずわが家から、笑顔で「おとうさん」「おかあさん」「おじーちゃん」「おばーちゃん」と呼びかけるようにいたしましょう。

母息たゆるそのきわに、泣きておろがむ手のあらば生きませる時、肩にあて、まごころこめてもみまつれ。母死にたもうそのきわに、泣きて念ずる声あらば生きませる時なぐさめのことばかわして、ほほえめよ。

人と人との結ぶものは、やさしい笑顔と、あたたかいことばです。これは特に親と子とのあいだでは、たいせつなことで、ちかごろは親にむかって、つめたいことばをかけたりしかめた顔で、ものをいう人が多いようです。老人に

親が死ぬるまぎわに、泣きさけんでおがむ手があるならば、生きていられる時に、まごころこめて肩をもみ、手足をなでてあげたいものです。人と人との結びつきは、からだを通し、手をとおして、愛の心がつたわってゆくのであります。

おかあさん おかあさん  
おかあさん おかあさん

○  
ひかる道あり 念仏の道

くりかえしくりかえし、二十四回も立山さんが「おかあさん」と書きつづられたのは、なぜでしょうか。このことは悲しいさけびでも、さびしい祈りでもありません。数が多いから良いというのではなくて、このことばひとつでよいのです。一度でよし、二度でよし、しかし紙の余白のあるかぎり、書きつけられ、呼びつけられたのです。

小さい声で「おかあさん」とつぶやいてみる。もうそれで胸にあたたかいものが、いっぱい入りみちてくださるのです。立山英夫が母を呼んでいる声は、そのまま母が子を呼んでいる声なのです。立山英夫が母を呼ぶというより、遠くはなれたおかあさんの心が、英夫さんの胸いっぱいにおどりこみ、母の呼びつけた声が、英夫さんの口から「おかあさん」とこぼれでたのです。

立山さんが、おかあさんの写真を胸に、そして「おかあさん」のことばひとつで、力強くニッコリ笑って、最後まで生きぬかれたように、私たちも、仏さまのお立ちすくめのおすがたを拝みながら、そのお慈悲をいただき、お念佛をよろこんで、強く明るくこの世を生きぬかねばなりません。

いかにせん いかにせばやと 御名よべば  
ふしぎとひらく ひとすじの道

業海のやみの波間にひとすじの

首楞嚴經（しゆりょうごんぎょう）という經典に、仏様が私たちをあわれみ念じたもうことは、母が子をおもうようであると説かれています。また善導大師は般舟讚（はんじゅさん）という著書のなかに、私たちが仏さまの淨土にめされてゆくことを父子相迎、父と子とが、たがいに迎えあうような、よろこびであると記されています。

仏さまは、私たちの親さまであります。仏さまは親と子とが逢う日を待ちながら、わが家にわが子を迎えるてたてを完成し、わが家をまよい出て、帰らない子どももゆくえを、さがしもとめて、わが子の名をよびつづけていられます。しかし子どもたちは、迷いの世界を流れあるいて、親のよびごとに答えようともしないのであります。

しかるにいちにち遊びつかれた子どもが、夕暮になつて、自分を呼びかける母のこえにやつとわが家を思い出します。しかし子どもたちは、やうやく心のふるさとである淨土を思い、仏さまの御名をよぶことができるようになりました。ここもとなく、わが子の帰りをまちわびる仏さまは、わが子の帰りくるすがたを見て、いかほど

よろこびたもうことでしょうか。

南無阿弥陀仏とは、ただの仏さまの名まえではなくて、この御名こそは、私たちを救いとろうと念じられた仏さまの大願業力であり、仏さまのおいのちが、私のいのちとなるように、はからわれた徳号であります。すなわち仏さまがその全生命を私たちにおしみなくあたえられる贈りものが六字の御名であります。そこで私たちは仏さまの光明大悲の御手にいだかれ、南無阿弥陀仏の名号の乳にやしなわれて、仏さまのいとし子として、淨土にめされて、さとりをひらくのであります。

されば私が仏さまの願力を信じて、その御名を呼ぶとき、仏さまの助ける力が、私の助かる力となつて下さるのですから、私が仏さまを呼ぶこえは、仏さまが私を呼びたもう声であり、私が仏さまのおめぐみを信仰するところに、仏さまは、その強く、大きな御力をすべて私にあたえたものであります。

みほとけのみなよぶこえは みほとけの

われをよびます みこえなりけり

親は呼び 子は呼びかえす 南無阿彌陀

よびつ よばれつ白道の旅

○ 今から二百年ほどまえ、肥後の国に生れたお坊さままで蒙

あります。

○

律師はまた字をかくことにもすぐれていて、博多の仙崖和尚（せんがいおじょう）と共に、その名筆が珍重されています。先年熊本市で律師の遺墨展が開かれましたが、そのなかに次のような歌が書いてありました。

たえやすき人のいのちは ろうそくの

火のきえぬまに しんのとるべし

今ではろうそくのしんどいっても、わからぬ人が多いと思いますが、昔のろうそくには大きな芯（しん）があつて、それがもえおちないよう早めにつみとついていました。私たちのいのちは消えやすいのですから、元気なうちに信心をいただき、あかるくゆたかな日ぐらしを、つづけるようにと教えられたわけであります。

外（そと）へあるちりやはこりを掃（はら）ふなら

心のうちもついでついでに

私たちは毎日、家の内外の掃除をして、ちりやはこりをとりのけていますが、心のうちのちりやはこりも掃うよう、心がけたいものだといましめられたのであります。

池山栄吉先生はドイツ文学の学者で、岡山高校、甲南高校、大谷大学などの教授をつとめて、多くの子弟を育成されましたが、熱心な真宗の信者で、ドイツ語訳の歎異鈔を

潮律師（こうちょううりつし）という人があります。律師は専光寺という真宗の寺に生れたのですが、氣性がはげしい方で、他力本願というのが気に入らぬといって、十六歳のとき寺を出て比叡山にのぼり、豪忍大僧正の弟子となりました。それからいのちがけの修業をつんで、二十歳の時に権律師（こんりつし）となり、更に法眼和尚位（ほうげんかしょうい）に叙せられ、遍照金剛の称号を冠することを許されました。その後各地に塔をたて、寺院を建立し、晩年には肥後や尾張の藩主に帰依されて、多くの人から、生きぼとけさまとうやまわれ、八十七歳で死去されました。

豪潮律師はこのように、その一生を自力聖道の修業につ

とめられましたが、律師は常に自分は、まだ聖道修業の入口にきたばかりで、ほんとうの修業はこれからであるといつてしづかにお念佛を申されたということであります。律師の最後の歌に

いざさらば 無一物とは申せども

おきみやげには 南無阿彌陀仏

自分にはなにひとつ残すものはないが、ただひとつ南無阿彌陀仏さまだけを、おきみやげに、一生のかたみとして、残しておくといります。律師はその八十余年

の年月を、骨身をけするような、きびしい修業をつまれて、最後には念佛ひとつに帰つて遷化（せんげ）せられたので

はじめ、たくさんのお信仰書を著わされております。先生は昭和十三年の秋に、六十七歳で逝かれましたが、先生が死を自覚されたとき、夫人にむかって、

おまえも一人になるんだなあ、しかし別れきりじゃないよ、またあえるからな。

と云われ、夫人が別れを悲しまれると

生きたくとも、いのちがないじゃ仕様がないではないいか、しつかり念佛するんだ、お念佛でどこまでも手をつないでいくんだ。

となくさめ、はげまされるのでした。そして先生が最後にのこされたことばは

なにも残るものはない、なにも残るものはない。ただ念佛だけが残つてくれる、ただ念佛だけが残つてくれる。えらいこつたよ、ありがたいこつたよ。というのでありました。

念  
仏  
詩

抄

木村

無

相

すべてのモノが  
すべてのコトが  
おろかなわたしを  
おしえてくれる  
十万億の諸仏なのです

もしもわたしに  
仏法があるなら  
それはお念仏さき  
ナムアミダブツ  
そのほか仏法は  
カケラもない  
わたしの仏法  
これ一つ  
ナムアミダブツ  
これ一つ  
ナムアミダブツ

わたしの仏法  
これ一つ  
ナムアミダブツ  
これ一つ  
ナムアミダブツ  
いたくばかり  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

# ナムアミタフヅ わたしの仏法

## 出離の一大事

召し上げられて  
ナムアミダブツさまに  
召し上げられて

ナムアミダブシ  
口先きだけし

ナムアミダブツ

アムアミタヅ

お引受けのお言葉

わたしの出離を  
お引受けのお言葉

このお詫びを  
いたたくばか  
そのおこころ

ナムアミダブツと  
いただくばかり

いたたくばかり  
いたたくばかり  
ナムアミダブツ

ああ思い こう思

帰するところは  
み名一つ——

凡夫の思いじや  
助からぬ

ミダの思いの  
ナムアミダブツ

帰するところは

これ一つ——

み名に依るより  
ほかはない

ナムアミダブツ

想

歳末の断

夫 正 田 花

死んで生まれよ！

このこころを得ざる限り

なればついに暗き地上の

憂わしき食客（いそうろう）に終わり果てなん

ときびしく警告している。

明治の大徳、行誠上人は「それば死なぬ人の云うこと」と、弟子達の浮いた論議をいつも大喝せられたと聞く。又

行も信もたまわってこそ  
行も信もたまわってこそ

ナムアミダブツ

今年もはや終りに臨み、私の一番痛恨に堪えないのは、友との別れであった。本年春、同信同窓同年の友の松本解雄さんが急逝し、ほどなく名古屋別院勤務の矢張り同年同輩だった川島了哲さんが急逝されたことは大きなショックであった。私はお蔭様で、病上手の死に下手で今日をながらえさせて貰っているが、お二人は別に病気らしいこともなしでいて突然の脳溢血でたおれられた。この悲しみの中からあらためて、友情のあり難さを思い知らされ始めた。すべてものは失ってのちにそのありがたさが解りはじめるとは、我ながら愚鈍さにあきれはてる。十月号に「久遠の友」の一文を草したのも友との別れによつて氣づかされた一端である。それにしても愚鈍な私共が一寸したことに気づかされるためにも大きな犠牲がなければならぬことに驚かされるのである。

先日、生命科学社の依頼で「いのちの尊さ」についての原稿を書いてたが、いのちの尊さも、死を遠くにやって

清沢満之師は「吾人は生死を併有す、生のみが我にあらず、死もまた我なり」と述べていられる。

併し身びいきな心に支配される私共は、死は遠くに離している、身の危険にあろうとか、大病すると、その時だけ

はビックリするが、喉元すぎると忘れててしまう、自分に都

合の悪いことは拒否して受けつけないのである。こうした

私共であるが無常の風は遠慮なしに襲うて来る。だから私

共は突然、老いとか死に直面させられ、周章狼狽して何か

にしがみつくが、それも万策つきの時、力なくして、万斛

の恨みを呑んでひとりで闇に沈まねばならないのが、凡情

に終始する私共のさだめで、それ以上は出られない。

ここにどうしてもなくてはならないのはよき人の導きである。

盲聾啞者のヘレンケラー女史は「三重苦の私には外

から教師は無用である。なくってはならないのは今一人

の私である」と家庭教師のサリバン女史を讀んでいるが、

死に対する盲聾啞者に等しい私共に、同心し同座して、同

喜同憂して下さる方一人あれば夜があける。私にとって愚

禿と名告られる親鸞聖人がその人であった。

然しこの様に私共に同じて下さることは、人間の力では

不可能である。生死を超えた仏の大悲大慈心を身にうけて

いられてはじめて出来ることである、沈まぬ船に乗つてこ

そ湯れる者に接して無事にたすけあげることが出来るので

釈迦牟尼仏としめしてぞ。迦耶城には應現する

と親鸞聖人は、五濁の凡愚の我等を救済するために、光

寿無量の阿弥陀仏が、人間の姿をもつてガヤ城にお生まれ

下さつて、菩提樹の下に降魔成道されたのであると仰いで

いられる。

又、仏在世の晩年、王舍城の大悲劇を縁として、韋提

希夫人が、阿弥陀仏の大悲に開眼されたことを、聖人は

恩徳広大釈迦如來

光台現國のそのなかに 安樂世界をえらばしむ

と、釈尊の本懐がそこに成就され、尽未來際がけて一切

の愚痴無智の凡夫の救済されるあかしが点ぜられたことを

随喜されている。

その道は聖人のひとりぎめではなく、天親菩薩が既に

釈迦の教法おおけれど 天親菩薩はねんごろに

煩惱成就のわれらには 弥陀の弘誓をすすめしむ

とすすめられ、善導大師は、

釈迦・弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

わかれが無上の信心を 登起せしめたまいかり

と、釈尊の慈悲方便の恩徳を仰がれて

娑婆水劫の苦をすてて 浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり 長時に慈恩を報ずべし  
と謝していられると聖人が示されたのである。

ある。ここに、同心同座、同喜同憂して下さる聖人はそのまま

仏の大悲心の権化にましますのである。和讃に

弥陀・觀音・大勢至、大願の船に乗じてぞ

生死の海に浮かびつつ 有情を呼ぼうて乗せ給う

とあるが、私は聖人の上に觀音・勢至の二菩薩の德光を

仰ぎ、同時に弥陀仏の心光の照護を頂いている。

### ○

西歐的自覺は自己の内に価値を見出すことであるけれど、東洋的自覺は自己の無価値を知らされて、価値の有無を超えた世界に浮かぶことであると教えられたが、智目・行足を欠いたどうすることも出来ない身なればこそ照護の

心光のやむことのない仏心を仰ぎ、且つ謝し、且つ懺するばかりである。

今年の年頭に

御名一つともしひとしておのずからひらけ行く道

みほとけのくに

と腰折一首をものしたが、歳末にも、否いのちの限り心光に照護されて淨土への旅を辿らせていたくばかりである。

十二月八月は仏陀の成道の聖日である。

久遠実成阿弥陀 五濁の凡愚をあわれみて

### ○

二千五百年前に出世された成道された仏陀であるが、そのまま現に私の煩惱の心中に入りみちて、煩惱の熾盛なことを照らし、そこに倦むことのない大慈悲心をそそいで下さっている仏陀でありますのである。

私は度々、盲・聾・啞の三重苦をもつたヘレンケラー女

史が「三重苦の私には外からの教師は無用である。なくつてはならぬのは、今一人の私である」と、文字通り献身的

教師のサリバン女史を讀えていたが、凡愚底

下の私には、その全体をすべて知らしめされて、しかも何

処々までも呆れたまわづ、捨てたまわぬ、阿弥陀の加威

力がなければ、永劫の沈淪をさだめとせねばならぬのである。

伝教大師のお歌に

鶯の山 高根にのみと思ひしに わが立つ岫に有明け

と、御自身に、仏陀の成道の光明を仰がれている。又西

行法師の讚歌に

人も見ぬ よしなき山の末だにも 澄むらん月の影を

と、何のとり柄もない無名の身におへだてのない慈光を  
こうむられる喜びを述べていられる。

私自身何かの機縁に心に去来するのは、九州の易行院法海師の遺詠とでも申すべき歌である。

明らけきひかりを四方のかぎりにて 月のうちなる武

藏野の原

と、広い武藏野の全体が十方くまなく照らされる月光の中にゴッソリとおさめられているのを見て、八万四千の煩惱具足の身、しかも何時はてる時もない無尽の煩惱の身も、光明遍照、寿命無量の仏心におさめられて、それぞれのところに、それぞれの時にたえずお導きをこうむることを渴仰されたのである。更に、

武藏野のチリチリ草の露たにも 身を細めてぞ月は入りぬる  
と、海綿が水を存分にふくむように、大慈大悲の入り満たぬところのないのを慶喜していられる。

○

「論註」に曇鸞大師は

「かの無碍光如來の名号はよく衆生の一切の無明を破すよく衆生の一切の志願を満てたまう。しかるに称名憶念することあれども、しかも無明なお存し、所願を満てざるはいかんとなば、……謂く如來は是れ実相の身なり是れ為物の身なりとしらざるなり云々」

と、不徹底な信心をいましめられている。つまるところ

### ともしび

聚墨生

無碍光の利益より 威徳廣大の信をえて  
かならず煩惱の水とけ即ち菩薩の水となる

(淨土高僧和讃)

新築の老人ホームに招かれたが、私も入所者たちとほとんど同年輩なのでしたしめた。聞けば、最近自殺者が出てよしであった。

そこでまず、一緒に仏拝をすませ、あいさつをしたが、濃淡の差はあっても、それぞれに心に暗い影が見うけられたので、次のようなお願ひをした。

「生は苦なり、と仏様がすでに仰言つているように、苦のない人はありません、實に苦難の多い人生ですが、そこに二通りの苦労人がある。一つは重なる苦難に笑いを失った孤独の人、他は苦難にあうごとにみがかれ、さすが苦労人だと慕われる人です。できることなら私たちもよい苦労人でありたいが、両者の分岐点は、苦難の氷塊をたくさん胸にかかえてあえいでいるか、あるいは氷さて、地上の氷は熱でとけるが、心の氷は何でとかせるでしょうか。幸いに私はよい先生に導かれて、苦の原因は身にもつ煩惱のためと知られ、このどしてみようも

仏陀の廣大無辺の徳を知らされていても、その仏陀は自分を救うて下さる方と領受出来ていない、即ちよその仏を拝んでいる、こちらで御本意を知らずにおへだてしているためと、指適されている。

歎異抄の九章に、念佛申していますが、よろこぶところもおこらず、淨土を願うこころも一向におこりませんが一体どうしたことありますかと、唯円房が聖人におたずね申した時、

「よろこぶべきこころをおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたことなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよたのもしく覺ゆるなり」

とお答え下さっているし、聖人の有名な常の仰せも

「弥陀五劫思惟の願をよくよく案すればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ」

と、わが御身にうけていられる、それがそのまま、私一人がためといただくだかりである。

ない煩惱の氷で苦しむ私どもを救いとげずはやまじとの仏様の本願がましますと聞き、何時でも何処でも、何をしていても念仏させて頂いています。すると火鉢に手をかざすと温かみが伝わるように、仏様のおまことが自然に通つてきて、罪障の氷がとかされるのです。賢にあればおのずとゆたかなり、と昔から教えられますが、困った問題を胸にかかえて信頼出来る徳高い人を尋ねると自然に行きつまた心もゆつたりとして来るものです。それには理屈はありません。仏様のお誓いの徳力がおのずからそうさせて下さるのでですから」と。

五〇年十月二十六日。





## あとがき

ら一も増産二も増産で経済成長に専念して、色々の危機はあつたけれど今日の日本が出来あがつてきました。

会を主にさせて頂き、皆様の法味もお頌ぢ下さるよう祈念いたします。

併し資源を外国にたより、製品を送つて

食糧までを輸入する日本に世界状勢が一寸でも変動すると八方塞がりで孤立無援、そして内乱となる危険が段々と潮のように押しつけています。こうした

地獄篇よみ終りぬれば除夜の鐘鳴り  
わたらなり何のきざしそ

ダンテの神曲の地獄篇を読まれた時の池山先生の歌でした。その時「ダンテの神曲は善惡の裁きの世界で、他人の地獄を書いているね」との批評でした。これにくらべ源信僧都の往生要集の地獄は、僧都自身の地獄で、読む者もそこに自分の姿を見出されるのであります。

○ 年の瀬が迫るにつけ自然に過去を省みそ

こに悲喜交々の恩出が去来してまいりま  
す。私共の学生時代は、昭和のはじめで、  
大学は出たけれど、と歌つたように深刻な  
就職難、しかも思想の弾圧はきびしく、若  
者は煩りきつて花が咲いても春を知らずと  
いう有様ありました。そこに親鸞聖人を  
慕う声がさかんになりました。其後満州國  
は独立し、大陸にその活路を求めて若い人  
々は走りましたが、世界は二分して、日独  
伊の提携に対し英米仏ソの連合、ほどなく  
大戦に突入し大敗北となつて、焦土の中か

△御案内▽  
○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午后一時半。南区駅上町二の八八、一道会館。

○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、新瑞橋終点下車。  
○ 昭和区小桜町二丁目四番地。市バス、北山町、又は御器所通り下車。

○ 電話八二一局七〇三七番  
名古屋市南区駅上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫  
印 刷 人 坂部 光雄  
名古屋市南区駅上町二ノ八八  
振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七

定価 半年 五〇〇円 (送共)  
一年 一〇〇〇円 (送共)

世相もそうでありますと、個人々々の歩  
みもまたこのことを忘れた生活は何かの  
きっかけで崩壊してしまいます。この時、  
念仏に御縁の結ばれた私共の切なる願い  
も、太子と聖人の真意をいただいて、世間  
安穩なれ、仏法ひろまれと念じつゝ与えら  
れた一隅をまもつて参りましょう。眞実な  
ものはいくら小さくても不滅のいのちを  
もつておりますことを信じて、雨も風もし  
のいで歩みましょう。

一道会館の日曜講話は、第三日曜には座談